観自在

弘長寺寺報
第三十四号
平成二十九年一月（年二回発行）

トランプ時代の襲来

弘長寺住職　森田裕光

明けましておめでとうございます。
平成二十九年の大変な年が幕開きました。
大方の予想をひっくり返して、ついにトランプ氏が大統領となった。
まさか自国利益のみを追求する徹底した保護主義理論をぶちまけ、醜悪な差別発言を繰り返す、尊厳・品性皆無の人物を米国人が選んでしまうとは思いませんでした。
かくれトランプ派の中にはまさか当選するとは思わず、現政権批判票として投票したら、アララ間違って当選してしまったと慌てた人も多かったことでしょう。
大統領就任前にツイッターでつぶやいただけで世界が動揺するのですから、就任後、この先取り巻きどころか世界が振り回されて大混乱となる事態も、現実味を帯びてきました。
台湾を保護し、中国との対決姿勢もみせており、南シナ海では日本をも巻き込んだ武力衝突になる可能性が高くなってきました。
一発弾丸が放たれれば大戦争へと直行です。
暗殺を期待する声も少なからずあるのですが、当然予測済みなのでより多くのＳＰに守られ、公の場にはなるべく姿を見せず、おそらく常時最高級の防弾チョッキで身を包むことでしょう。
近年突如出現したＩＳイスラム国には相当驚かされたのですが、幸い日本にはまだ火の粉が飛んで来ていません。
でも今度は火の粉どころではなく、自らが火の海になりそうな気配です。
今のうちに平和の有り難さを十分に味わっておいた方が良さそうです。

平成２８年度護持会研修旅行は
岡山県玉島・良寛さまの円通寺へ
三十名の参加でした

宗教の救いとは

弘長寺護持会
会長　武田民三

明けましておめでとうございます。

弘長寺護持会の皆様には、ご健勝で爽やかな新年をお迎えのこと、心よりお喜び申し上げます。

なんと、ある月刊誌に「いま、宗教に救いはあるか」とのタイトルがあり、その一つに「全日本仏教会に圧勝したアマゾンお坊さん便として特集を企画していました。

これは聞き捨てならないテーマだと思い、紹介したいと思います。冒頭の大手通販会社「アマゾン」が「お坊さん便」で仏教会に圧勝した話。

読経、法話、交通費込みで全国一律三万五千円でネット販売される「僧侶の宅配便」が議論を呼んでいるのです。

まず目に飛び込んで来たのが、花束を持った中年カップルと、ツルツル頭のお坊さんとの寺の門前での写真！

それが法要、法事の際のお坊さんを購入できるとゆうものです。

「お坊さん便」と称する商品は、クレジット決済できるのです。

これは種々の理由を原因とするものではありましょうが、「宗教のネット商取引」であると言わなければならないでしょうかね……

京都の寺の副住職を務める（普段は出版社で仕事をしている）若い僧侶が「棚経に伺う件数が、毎年少しずつ減ってきてるように感じる」と嘆いています。

「檀家が離れていくのは何とも心寂しいものだ。

またそれを食い止められなかった僧侶としての努力不足を痛感している」とも述べています。

檀家離れは、地方ではもっと顕著であると思うのですが。

今すぐに存亡に関わることはなくても、檀家の減少はダイレクトに寺院経営を直撃する。

各寺院の懐事情はベールに包まれているが、檀家一軒が減れば、墓地管理料、護持費、棚経や年忌法要の布施、葬式の布施など、年間に数万円から十数万円程度の収入減になることは推測できますね。

地方差はあると思いますが、寺院が専業で成り立つには、最低でも二五〇軒程度は必要であるだろうと感じますが……

どこかの若い住職が月刊誌「住職」を上梓し、そこに書いているルポルタージュに、「現在日本に寺院が約七万七千ヶ寺あり、コンビニエンスストアの約五万四千店より二万以上も多いけども、そのうち三〇％から四〇％の寺が無住との推定値もある」と記しています。

「減少の理由は幾つかある中で（内訳は、伝統の宗派別とか、寺の後継者不在とか、地域社会の高齢化、

過疎化、等々あるが）

①寺（住職）は、お布施で生きているのか？

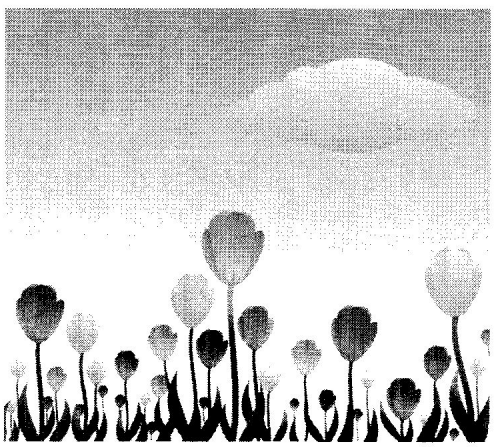
①そのお布施は檀家が支払う。

であれば檀家に好かれなければ、収入に直接支障が生まれる！」と指摘しています。

それは「住職が檀家の皆さんから尊敬される存在であることが重要であり、信徒（檀家）の信頼を損なう存在になれば、直ちに収入に反映するかも」と断言しています。

「お供物を、母子家庭や、生活困窮者に差し上げている寺（住職）もあって、お寺おやつクラブとかの設立がある」と紹介し、社会と係わることが重要な点とも述べています。

東京大学医学部の臨床医が体験を通した思索から「人は死なない！」と題した著書に、「宗教者が読経だけでなく現象界から離脱する人を精神的に救うことができるかが大問題！宗派は問題とならないのだ！スピルチュアルの問題を解決することこそが重要」として、「肉体は死んでもなくならないものを教え伝えるお寺さんでありたいもの」とあります。



○自分の本性を知ること。

○自分の人生の価値を知らしめる。

○理性の意味を見失わないように指導する。

ともあれ、仏教が葬式仏教と言われることのないように精進努力しなければと痛感する次第です。

然し、幸せにも私たち弘長寺護持会員（檀家）は立派な十八世 裕光方丈様のもと、後継の大裕さまを頂き、檀家総力で完成した立派な伽藍を擁する菩提寺があります。

各家のご先祖様に感謝し、菩提寺に中心帰一しつつ、努めてまいりたいものです。

先般、「歌に潜む仏教のこころ」と題して、平成二十八年度檀信徒地方研修会が、出雲市の斐川文化会館でありました。

講師の長田暁二さんが、「明治・大正・昭和・平成のヒット曲に仏教の心と教えを探る」として講演なさいました。

長田暁二さんは岡山県内の曹洞宗の寺に生まれ、一九五三年 駒沢大学英文学部を卒業後にキングレコードに入社され三十年間レコーディングディレクター一筋に努め、その後、精力的に文筆活動に精進されてから、出家得度された異色の僧侶です。

講演の要諦は、「人はなぜ歌うのか！幸福だから歌うのではなくて歌うから幸せになる」であったかと理解しています。

それは正に感動的でありまして、大部分の聴衆が涙して聴き入りました。

仏教講座では、こんな感激はあまり体験したことを知りません。　ご本人は、「音楽芸能界と言う道楽の世界に六十年以上浸り続けた生臭坊主とのことですが、

実に自由奔放で磊落、洒脱、柔軟な心と、博学なアドリブに富んだ話術に堪能させられました。

最近、医者と作曲家が共同開発した超簡単な「物忘れ、認知症にならない脳トレ」が紹介されています。

「楽しく歌うだけで脳が、たちまち若返る！」として、見ながらすぐに実践できる動画ＤＶＤ付きの書物がヒットしています。

その本は「医学博士　周藤　寛と作曲家　山田ゆうすけ」の共著で、「株式会社コスモ21」から発売されています。

内容は「音楽脳」を刺激すると脳が目覚めるとあります。

①誰でも歌っている瞬間は人生の主役！

②楽しく歌っていると頭もフル回転！

医学博士で臨床医が最前線で実証した健康長寿になる歌い方を「演歌療法」だと言うのです。

カラオケルームが新しい医療の場となる訳ですね。

「幸福ホルモンの分泌が活性化して患者がイキイキしてくる」とも述べています。

仏様と演歌が……と思われる人もあるでしょうが、だって昔の哲人は「心に太陽を！くちびるに歌を！」と教えていますよね。

ステージに上がって歌うばかりでなくて、常にメロディーをハミングするだけで効果がある、と言っていますよ。

今を、明るく楽しく感謝して生き抜くことが、来世の幸せをも約束してくれるのだ、と思いたいですね。

楽しく歌って明るい日々を送りませんか。

護持会の皆様が、益々ご健勝でご多幸なることを心からお祈りいたします、ありがとうございます。合掌

健康長寿の秘訣は〝脳活〟にあり

護持会副会長　内田　松寿

平成２９（２０１７）年酉年が明けました。皆様には恙なく新年をお迎えのことと思います。

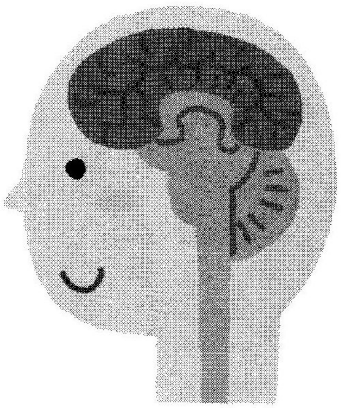
昨年は国外はさておき国内においては熊本地震に始まり鳥取県中部地震、近くは福島県沖地震が頻発しており、あらためてこの国は正真正銘の地震国なのだと痛感しました。

本年が穏やかで心豊かな毎日でありますよう願っています。

新春の門出にあたり、今年こそはと決意を新たにされたこともおありかと思います。

年齢的にも大きな山を越え、やる気、元気を充電し、チャレンジ翁の精神で行きたいと思っています。

脳科学者の最高権威といわれている久保田競（きそう）さんは〝脳活〟で脳の老化は防げるといっています。



脳は使えば使うほどよく働くようになるからです。

〝脳活〟でまず大事なことは「規則正しい睡眠（７時間）」

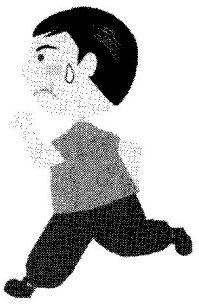
次に大切なのが「食事（魚・卵・乳製品は脳の味方）」です。

さらに重要な習慣となるのは「運動（有酸素運動）」です。

中でもジョギングはウォーキングより運動が複雑化さ

れ、一層効果があるようです。

昨年から早朝にウォーキングを始め何とか続いています。



今年はジョギングも交えたものにしたいと決意したところです。

運動が難しい人にお勧めの〝脳活〟は「美しいものを見たり創作習慣（絵・陶芸・書・料理・歌等）」です。楽しいと思うことをやると、脳にはとてもいい刺激となるからです。ぜひ習慣にしてみたいものです。

これらのことが老化を少しでも遅らせ、病気にならない「健康長寿」につながっていくようです。

この年も目標持ちつつ、こつこつと元気で励む日々でありたし。

合掌

大本山総持寺参拝と 小田原最乗寺・箱根林泉寺・江ノ島・鎌倉・伊東温泉

期　日	平成２９年６月２０日（火）～２２日（木）（２泊３日）
定　員	１２０名
会　費	８４，０００円（本山供養料・本山記念写真代含む）
申し込み方法	申込金１０，０００円（会費充当）を添えて、菩提寺へ３月末日までにお申し込み下さい

◎旅行日程　〈→飛行機・＝貸切バス〉

6/20 (火)	米子空港 7:15発 →→→→〈ANA-382〉→→→→ 羽田空港 8:35着 ＝＝（現地貸切バス）＝＝ 9:50頃 出雲空港 7:50発 →→→→〈JAL-276〉→→→→ 羽田空港 9:10着 ＝＝（現地貸切バス）＝＝ 9:50頃 ＝＝〈首都高速〉＝＝ 【常設展観覧】**江戸東京博物館** 10:40～12:00頃 ＝＝【ちゃんこ料理予定】両国(昼食) 12:20～13:50頃 ＝＝ ＝〈首都高速〉＝ **大本山總持寺（泊＝三松閣）** 15:00頃着 【檀信徒本山研修会】
6/21 (水)	本山【先祖供養・研修等】9:00頃発 ＝＝〈首都高・東名道〉＝＝ 大井松田IC ＝＝ ＝＝ **大雄山最乗寺拝登【道了尊(どうりょうそん)】** 10:40～12:00頃 【専門僧堂】《団体祈祷・拝観他》 ＝＝ 小田原：鈴廣(昼食) 12:30～13:30頃 ＝＝ ＝ 【内山愚童師ゆかりの寺】**大光山林泉寺参拝** 14:00～15:20頃 ＝〈十国峠〉＝ **伊東温泉（泊：サンハトヤ）** 17:00頃着 ※林泉寺様本堂の収容人数は、70名位までで、２班に分けてご説明していただきます。
6/22 (木)	伊東温泉 8:30頃発 ＝〈西湘バイパス〉＝ 【日本三大弁財天】**江ノ島：江島神社【辺津宮(へつみや)】** 10:30～12:00頃 〈エスカー1区利用〉 ＝ ＝ 鎌倉(昼食) 12:20～13:20頃 ＝ **鎌倉大仏** 13:40～14:20頃 ＝ 【平成14年建立】**道元禅師顕彰碑・鶴岡八幡宮** 14:40～15:20頃 ＝ ＝ 羽田空港第2ターミナル 16:40頃着（夕＝自由食） →→→→〈ANA-387〉→→→→ 米子空港 18:25発 19:45着 ＝ 羽田空港第1ターミナル 16:40頃着（夕＝自由食） →→→→〈JAL-287〉→→→→ 出雲空港 18:30発 19:55着

お知らせ　お願い

●護持会副会長　坂本研次氏がお亡くなりになりました。

本年一月、長年護持会の副会長をお務めになり、多くの方から慕われておられた久戸坂本研次氏がお亡くなりになりました、享年九十二歳。謹んでご冥福をお祈りいたします。

幾多の手術を乗り越え、不死身で復活を果たし、老いて益々意気盛ん、反骨精神・チャレンジ精神・ボランティア精神に満ち、ずーずー弁で地域活性化に尽力され、また愛煙家であり大酒豪でありました。

●新護持会副会長に和名佐　内田磯弘氏を任命いたします

坂本研次氏の後任副会長として、監査委員としてお務めいただいております「和名佐地区・内田磯弘氏」を会則通り、顧問（住職）が指名し、快諾をいただきました。会則により今年度総会にて承認をいただきます。

●大裕が梅花流四級師範になります

副住職大裕は現在宗務庁梅花流師範養成所に入所して二年目ですが、本年二月最後の研修で試験を受けて四級師範となり、房の色も上級の白房となります。

●檀家総数は三三二軒となりました

檀家離れ現象が取りざたされるのですが、弘長寺は少しづつ増えています。現在三三二軒となりました。

人生における選択

副住職　大裕

人の人生というのは選択の連続です。そしてこれまでの人生を振り返っていくと、良い選択よりも悪い選択の方が印象的に残っているような気が致します。

「あの時はこうして正解だった！」というよりも、「あの時こうしていればなあ」という記憶の方が多いのではないでしょうか。

先日、喉頭がんで声帯を摘出していた音楽プロデューサーの「つんく」さんが「食道発声法」に依って意思疎通が出来る様になってきた、と月刊誌に寄稿した手記で明かしたとニュースがありました。

喉頭がんは比較的症状がわかりやすく、早期発見がされやすいがんだと言います。

私の友人でも、親御さんが喉頭がんを発症したという方が居ましたが早期発見、治療によってすっかり回復していました。

つんくさんの場合は、ある時から声枯れが長く続いた為検査した結果、がんが判明。

その後二十年来の付きあいだという医師を裏切る様と考えてしまいセカンドオピニオンを受けずに居た結果、治ったと思われていたがんが残っており治療が遅れ、声帯摘出に至ったそうです。

セカンドオピニオンとは、主治医とは別の医師に聴く第二の意見の事を言います。勘違いされがちですが、主治医を変更するくら替えの様な事ではなくて、あくまで他の意見を聴くことで判断を明確にする目的のものです。

「もし、別の選択をしていたら」とつんくさんも語っていますが、今回の手記の中に主治医や医療そのものに対する非難の言葉は一切なかったそうです。

更に、「声帯を失った今、不幸せかというと、決してそうでない」とも語ります。

病気を発表した事で世の中のがん患者の方の事も知る事が出来たし、通い始めた食道発声の会ではものを教わる事の新鮮さを改めて感じられたと。

この事はつんくさんの人生の中でも大きな選択だったと思いますが、これだけ前向きに考えられるという事は本当に大切な事だと思うのです。

「前向きに」というとなんとなく子供っぽいというか、から元気というか、そんな印象を受けるかもしれませんが、とにかく「前向きに」という事なのです。

間違いは認めた上で、さてどうしようかな。と前向きに考える事が重要だと思うのです。

私も母をがんで亡くしてしまいました。勿論、死というのは人生の終わりであり、良い結果とは言え無いかもしれません。

ですが、がんを機に母との絆を深められ、短い間でしたが色々な思い出を作ることが出来ました。

その間も沢山の選択を誤ったと思いますが、それが今の人生と私の気持ちに良い方向に働いていると信じています。

合掌

良寛様の円通寺拝登

護持会研修旅行

住職

昨年は良寛さまの修行された寺、岡山の円通寺様に日帰りで出かけることになりました。

一年おきに日帰りと一泊を交互に行っています。

本堂にて本尊上供、導師・住職

出発日の　半月前でも十五名ぐらいしか申し込みはなかったのに、出発日が近づくにつれて徐々に増え、結局三十名ほど集まりました。

前もって良寛さまの資料を作成し、大型バスの中で十五分ほど良寛さまについて住職がお話をしました。

円通寺さまに前知識なしで突然拝登するよりも、事前知識があった方が拝登に意味が増すはずですから。

私の疑問は、正法眼蔵に深く傾倒し、厳格な修行に打ち込み厳しい求道心を持ち得た方が、なぜ子供と無邪気に遊ぶことができるのか、その落差が理解できなかった点です。

普通なら、子供に優しく相対することはできても、世を捨てた厳格な仏道修行者が、手まりをついたり、一緒になってかくれんぼに没頭したりすることまでは到底できないと思ったからなのです。

その答えは円通寺様に行っても導きだせませんでした。

やはり思うに、何事に対しても一途に、脇目も振らずその事に当たることができる、そういう生真面目を絵に描いたような性分なのだろうと思います。

子供と相対する時は自分も子供になりきることができる、修行するときは修行者になりきることができる、とことんこだわりを捨てることができる、それが良寛さまなのだろうと思う。

今のところこれしか答えが出てきません。

いつの日か国上山の五合庵を訪れて見たい、そこから山々の景色を見つめれば、案外別の答えを導き出せるかもしれません。

良寛さまの歌集を手に入れました。

千五百首もの歌があります。

その中で面白いと思うのは、

「草の庵に　寝ても覚めても申すこと　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏」

「我ならば　うれしくもあるか弥陀仏の　います御国に　行くと思へば」

「良寛に　辞世あるかと　人問わば　南無阿弥陀仏と　言うと答へよ」

「愚かなる　身こそなかなか　うれしけれ　弥陀の誓ひに　会うと思へば」

「他力とは　野中に立てし　竹なれや　よりさわらぬを　他力とぞいふ」

「不可思議の　弥陀の誓ひの　なかりせば　何をこの世の　思い出にせむ」

これを見ると、この方は何宗の僧侶であるのか見間違えてしまいそうです。

仏教に対する宗派のこだ

わりなどないのです。

しかしこれは良寛さまの方がまともです。

正法眼蔵の中でも、道元禅師は間違いなく「南無三世十方諸仏」であって、決して「南無釈迦牟尼仏だけが本尊だ」などという教えなど、どこを探してもないのです。

いえ、言いたいのは一寺院の寺報とは言い放題に書くのをもらうまいにしてレッドカードなので、こうまでになりそうなのですが、ここまでしてもおきなのだから、江戸時代までよきのに、仏はどの仏も仏なのんだから、本尊仏にはこだわらないよう方が、本当はこだわりをすてようと思いますけどね。

禅宗らしくて良いと思います。

あ、この件は忘れて下さい。

円通寺様を後にして初めて倉敷の美観地区を訪れたのですが、何という優雅な表情を持った街であろうか。

佇む幾多の店の中の一軒、備前焼の店に入り、備前焼の良さなど全くわからない凡僧ですが、そのお店の二階にて備前焼の椀でコーヒーを頂いたら、味が一味も二味も違っていました。

とても一日で廻りつくせません。

オルゴール館の生演奏聴きたかったのに、時間がなく、必ずまた訪れようと心に誓った。

良寛荘にて昼食

倉敷美観地区、その名の通り美しい情緒あふれる街並みでした

住職は考える①

輪廻転生を考える
（霊魂を説く）

住職

中国管区教化センターからラジオ法話の原稿依頼が来た。その原稿をそのままここに載せてみることにいたします。

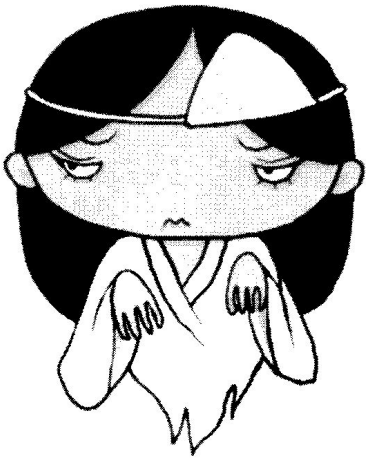
不思議な不思議な体験

平成二十五年八月十日、三十年連れ添った妻が膵臓癌を患い、半年ほど苦しんだ後、満五十五歳の若さで亡くなりました。

ちょうどお盆直前に亡くなりましたので直ぐに葬儀というわけにいかず、九日後の八月十九日に悲しい葬儀をいたしました。

翌二十日深夜一時半頃でした。二階の寝室で眠っていると、突如階段を誰かが上ってくる大きな足音で目が覚めました。

妻がもういないものですから「泥棒」だと気づき、大して役に立たないのと思えるのですが、枕元に置いてある木の棒を取ろうとしましたけれども、体が全く動きません、金縛りにあったのです。



その足音は階段を上がりきったかと思うと、隣の妻の部屋のふすまをパタンと閉めたのです。

これはまずいことになったと思い、渾身の力を振り絞って金縛りを解き、棒を握って怒鳴り込みながら隣の部屋へ入りました。

「誰だっ」…ところが誰もいないのです。

くまなく探したのですが何もいないのです。

そこで初めて気がつきました、「ああそうか、あんただったのか」

よく考えてみれば、泥棒があんな大きな足音を立てるはずがありません。

その日から私は元気を取り戻しました。

いつでも妻が近くにいるんだなと思えるようになりました。

でもその日限り、妻は音も姿も見せてくれません。

ですから最近は「あの時足音で報せてくれたのはお別れを言いにきたのかもしれない」と思うようになりました。

平成二十八年度お坊さんの研修の場で、講師・薄井秀夫先生から学びました。

現代の仏教では、霊魂のことに言及するのは、程度の低いこと、あるいはいかがわしいこと、だと考えられている節がある。

教義的にいえばそれはやむを得ないだろう。

お釈迦様もそうした問題に触れていないし、道元禅師もしかりです。

しかし葬儀を、霊魂の存在なしに説明することができるだろうか。

霊魂の存在を前提としない葬儀はただのお別れ会である。

その場でどんなに高度な仏教哲学を説こうとも、遺族の心には決して届かないだろう。

二〇〇八年の読売新聞調査「日本人の宗教観」で、（生まれ変わる・別の世界に行く・お墓にいる）を合わせれば、七割を超える人が霊の存在を信じていることになります。

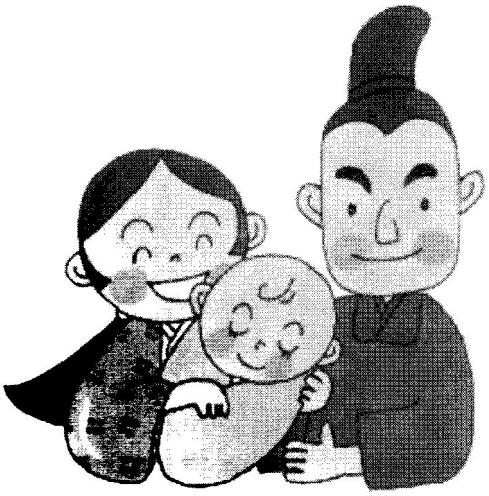
薄井先生が語気を強めておっしゃった。

「だからこそ、僧侶はもっと自信を持って、霊魂のことを語るべきだ」

住職は考える②

ラジオ法話としてこのような原稿を書きました、採用されるかどうかは未知数ですが。

いろんな法話の席でこのお話をしていますから、お聞きになった方もたくさんいらっしゃると思います。



先生の熱い情熱が伝わってくる原稿です。

今まであわやタブーとされていたような問題を、宗務所報に載せていただいた所報編集委員方に対して感謝をいたします。

それを見て急遽、住職は考える「法華経に学ぶ」の続きを変更して、「輪廻転生」について書きたいと思いました。

一昨年発行された竹倉史人著の「輪廻転生」を興味深く読みました。

当に一読の価値ありです。

胡散臭いあちらの世界的な内容ではなく、氏の修士論文に加筆された、学術的にきちんと整理されている説得力の高い本でした。

著者は、東京大学思想文化学科を卒業、予備校講師を経て、東京工業大学大学院修士課程入学、現在同大学院社会理工学研究科博士課程在籍中の四十一歳、専門は宗教人類学とのこと。

薄井先生は読売新聞の調査データを元にされていますが、竹倉氏は同じ二〇〇八年の世界最大規模の国際社会調査プログラム（ＩＳＳＰ）のデータを採用しておられます。

日本国内の調査は、ＮＨＫ放送文化研究所が担当しましたがその調査によると、日本人は四二・六％が輪廻転生があると回答しています。

両データがどちらがどれほど正確かは別にして、日本人が輪廻転生を支持している割合が、およそ三人から四人に一人は存在するという事実は私の想定をはるかに超えておりました。

ここで、実は輪廻転生が拙僧のこんな身近にあったという事例を急に思い出しました。

私は安来市広瀬町布部・安養寺の長男だったのですが、現在安養寺は弟の正光師が後を継いでいます。

私ども兄弟の間に妹がいたのですが、生まれて八ヶ月で病死しております。

母は出棺の際、棺に取りすがって埋めるのは嫌だとだだをこね、父を困らせ、悲嘆にくれたとのことでした。

その妹の名前は「さゆり」です。

ところがその後生まれた正光師の左足の外くるぶしの上に「さゆり」の「サ」という文字

住職は考える③

がカタカナでクッキリと青あざとなって現れていたのです。

母はさゆりの生まれ変わりだと、後々も大層喜んでおりました。

単なる偶然ですますことができない、不思議な輪廻転生の確かな現象が、何と一番身近な我が家にもあったのです。

ここからは少し学術的になります、お寺さん向けです。

竹倉氏は輪廻転生を「再生型」「輪廻型」「リインカネーション型」の三つの分類にわけて解説しておられますが、その中身は学術的で複雑ですので詳細は省くことにいたします。

要は種々な生まれ変わりがあるということです。

家族や親族、同族に生まれ変わるとか、因果応報の原理（生前の行為の善悪）を秘めたものとか、リインカネーションは進歩型です。

生まれ変わって魂を浄化していくために転生がある。

竹倉氏は仏教についての造詣も深く、仏陀についても次のような重要な論説を説いています。

仏陀は、輪廻の主体は〈霊魂アートマン〉ではなく〈五蘊ごうん〉とした点に独自性があります。

五蘊とは私自身を構成している五つの物の集まりです。

般若心経では色受想行識が五蘊となります。

ブッダは、我々が〈私〉だと思っているものは、実はこの五つの構成要素の集積に過ぎない、と言ったのです。

これは恐るべき洞察を含んでいます。

というのも、〈私〉なるものがまず最初にあって、それを分解してみたら五つになった、ということではないのです。

そうではなくて、われわれが〈私〉だと思っているものが、そもそも五つの要素が集まっただけのものに過ぎないと言っているのです。

ブッダが問題にしたのは、多くの人が〈私〉を〈実体〉とみなしていることでした。

この実体というのは永遠不変の存在という意味です。

つまり、〈実体〉はあらゆる因果関係の世界から超越しているのです。

もし両親がいなければ今ここにいる〈私〉は存在していませんし、その父と母もまたかれら自身の父と母を必要とします。

このように〈私〉は他者との相互依存関係のなかで存在可能なものとなっています。

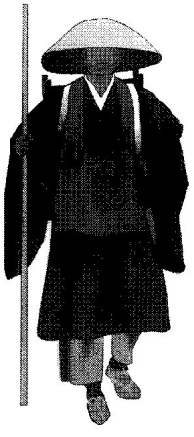
〈私〉がいまここに存在しているという単純な事実をひとつとってみても、それは因果関係の内側で起きていることですから〈私〉を〈実体〉とみなすことは困難です。

こうしてみていくとおよそ人間が認識したり経験したりするものの中に〈実体〉と呼べるものは存在しないことがわかります。

かりにそのようなものが実在したとしても、それは人間にとって経験不可能な〈世界外〉のものとなるでしょう。

しばしば誤解されるのですが、ブッダは〈霊魂アートマン〉の存在を否定したわけではありません。

すべてのものはつねに生滅変化していること（諸行無常）、すべてのものは永遠の実在であるような実体を持たないこと（諸法無我）、そしてそれゆえ、移ろいゆく実体のないものへの執着は苦悩でしかないこと（一切皆苦）を説きました。



つまりこれはブッダの教説の骨子が、あくまで把捉可能な〈世界内〉に向けられていることを意味しています。

住職は考える ④

その上で、〈私〉の本質をなす〈実体〉としてのアートマンが実在するのかしないのか、そのような証明のしようがない形而上学的な問いにかかずらうことを戒めたのです。

これはアートマンを否定することとは全く別のことです。

氏の難しい論はここまでにします。

やはり私が一番興味があるのは前世を記憶している子供たちの具体事例です。

この本にも外国の事例はたくさん載っているのですが、数が少なくとも日本の事例が一番説得力があると思います。

それも近代とか現代ではなくて江戸時代です。

中でも国学者、平田篤胤の記録「勝五郎再生記聞」は詳細なドキュメントが記録されている。

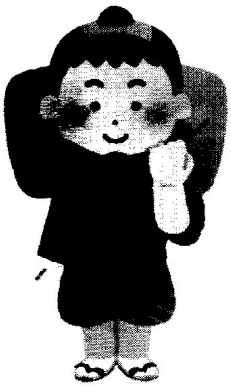
多摩郡柚木領中野村、当時八歳の勝五郎が、「おらはよく覚えている。もとは程久保村の久兵衛という人の子で、藤蔵という名前だった」と答えたことが事の発端でした。

「母の名はおしづ、小さい時に久兵衛は死に、その後に半四郎というのがやって来て父になりかわいがってくれた。おらは六歳の時に死んだが、その後この家の母の腹に入って生まれた」

両親と祖母は驚きましたが子供の話であるし、またあまりに奇妙な話なのでそのままにしておきました。

祖母つやが添い寝していると

ある夜勝五郎がさらに詳しい前世の思い出をつやに話しました。



前世のことは四歳くらいまではよく覚えていたが、それからだんだん忘れてしまった。

大した病気ではなかったが薬を飲まなかったので死んでしまった。

息が絶える時には何の苦しみもなく、その後ちょっと苦しくなったがまた何ともなくなった。

体を棺桶の中に押し込められたので飛び出して傍らにいた。

山に葬りに行く時には白く覆った棺の上に乗って行った。

棺桶を穴へ落とし入れた時大きな音がして驚いたのでよく覚えている。

〜中略〜

そしたら長い白髪を垂らして黒い着物を着たおじいさんが現れて、おいでと言うのでそのままついていったら、小高くなった綺麗な芝生へ出たので、そこで遊んだ。

満開の花の一つを手折ろうとしたら小さな鳥があらわれておどされたのは本当に怖かった。

〜中略〜

あるとき白髪のおじいさんと家の向かいの道を歩いていると、おじいさんがこの家を指し、「あそこの家に入って生まれ変われ」といった。

おじいさんと別れた後は言われた通りに、庭の柿の木の下に三日間たたずみ、窓の穴から家の中に入った。

それからかまどのそばでさらに三日過ごした。その後母の腹の中に入ったと思うけどあまりよく覚えていない。

でもお腹の母が苦しいだろうと、時に体を脇の方へ寄せたりしたことは覚えている。

生まれる時は何も苦しいことはなかった。

勝五郎の一件は村中に知れ渡ることになりました。

翌年、程久保村から一人の老人が訪ねてきました。

あまりに勝五郎の話が符号しているので半四郎夫婦が話を聞きたがっておると告げる。

その後つやが勝五郎を程久保村まで連れて行くことになります。

勝五郎が先に立って歩き、ある家の前に来るとこの家だと駆け込みました。

勝五郎の言葉通りでした そして勝五郎と半四郎夫婦は初めて面会しました。

半四郎夫婦はかねて人伝いには聞いていたものの、改めてつやの話を聞き、不思議がったり悲しんだりしながら涙にくれたと言います。

そして夫婦は勝五郎を抱き上げ、つくづくと顔を眺め、「亡くなった藤蔵が六歳だった時によく似ている」と何度も言いました。勝五郎の噂は江戸にまで拡がり、興味をもった若桜藩主の池田冠山は、わざわざ勝五郎の家まで聞き取りに来ました。

また江戸の学者平田篤胤が勝五郎を自宅に招き国学者 伴信友と共に聞き取り調査をしてまとめられたのがこの「勝五郎再生前生話」になります。

当時随一の学者たちが速やかに記録したことは幸いでした

私はこの話だけで十分です。

了